

雑歌：文苑

著者	錦山，基紀，一心，芝峰，桃江，?泉，山人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	6 2
ページ	5 6 - 5 8
発行年	1897-12-27
その他の言語のタイトル	雑歌：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5022

紅葉を折りてそ人にかたならなむ今日のまどゐの心ふかさを
秋山の夕日うつろふもみち葉をたをるもをしくたをらぬをし
今日はいさ錦きつゆもかへらまし見きやと問はん人のあるかに
夕日影にはふ山への紅葉に春をうつまて小鳥なくなり

評曰、春をうつして一首の眼、おもしろし

もみち葉のあかき心を今日こゝにつとふ學ひの友にこそみれ

評曰、なんなし

其前夜の思ひを

いく度か夜半のあらしに寢覺まつ明日見ん菴の紅葉いかにと

評曰、秋の色を惜しむまことにいくの如し

雑歌

草菴紅葉

はらふへき人もあらしに紅葉散る柴の戸さしの秋の夕暮

評曰、感ふかし

擣衣

たがためにうつか砧のたへく音を聞ゆる小夜のねさめに

初霜

錦山

芝峰

奇熊

一心

山人

錦山

基紀

澄む月にさゆる夕の白露や身にしみわたる今朝の初霜

河上霧

ゆふ月のやどりやいつこ絶間なく畫津の川霧そらにたちたつ

成道寺の紅葉

秋風に木々のもみち葉ちりくれば池の水さへちしをどそなる

雲岩寺に詣て

さらぬたに昔をしのふ所なりいたくなふりを秋のむらさめ

田原坂懐古

玉われふりにし跡の田原坂まつのあらしや名残なるらむ

田原坂ありし古をとひくれば人まつむえを音にたてなく

菊

れくれても花の色香のれくればぬは霜にこれる菊にそありける

評曰、人のまたいひいたらさる處なり

富士艦の歡迎に

いにしへのふしの煙を波の上に見るそうれしき今日にもある哉

評曰、めつらしきよみさまなり

船路にてよめる

播磨灘追門の汐風たちぬらえさし行く方に雲迷ふなり

一心

芝峰

桃江

清泉

はるくも八重の沙路をゆられきてなほも雲井を指して行く哉
見渡せば須磨も明石もなかりけり瀬戸の内海波の嶋山
行末ばいかに鳴海の濱千鳥はてなき海に身をやつくさん

霜夜

風さやく軒場につもる小夜霜にこほりて寒き白川の水
たらちねのなさげもあつき冬衣重ねくも思ふ夜半かな

落葉

冬ふかくなりけらしな木枯のさわかぬ夜半も木の葉散りけり
さゝかにの糸一筋を命にてしはし梢に落葉のこれり

評曰、めてたし

爐邊閑話

まどむきて語ろふ夜半はたくしはの煙るもいとよ樂しかりける
埋火の消ゆるもしらて思ふどち行末遠くかたるたのしさ

歳暮述懐

たどり行くふみの學ひの道れそく今年もはや暮にける哉
ことまこそことしこそ思ひまを又も今年のかれにけるかな
流れゆく月日とかねてまりなから驚かれぬる年の暮かな

評曰、くり返しくても暮れ行く海のやちたひせん方もなし、われ常にこの感あり同感々々